
王様ゲーム

マシコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王様ゲーム

【Nコード】

N0196D

【作者名】

マシコ

【あらすじ】

どこにでもいるような6人の女子高生のピンクな日常生活ストーリー。でも、それは見せかけだけで…学校全体を巻き込み、キャラや学級崩壊寸前！謎多き登場人物も大量発生？黒族やセクハラ、犯罪が見え隠れする6人の女の子によるドキドキの学園コメディ！

Mission 1 嗚呼、愛しのBBC

どうも、増田桂^{マスタ カッラ}です。

いつも嫌なんです、今日の指令は今までで一番嫌な指令です。
よりによって 校長室に入って通販の荷物を取って来いだ？

「……有り得ねえよ」

溜め息と共に呟いて肩を落とすと、階段をゆっくり降りる。
真面目に校長だけは関わりたくなかった

「呪われないかな…黒魔術とか使われそう…」

自分の勝手なイメージだが、アノ校長だけは本当にそんな感じが
してしょうがない！

一階に降りると、階段の陰に隠れて回りの様子を伺い素早く廊下
へ移動。

誰も来ないのを確認して壁沿いを歩き、校長室の前に着くと床に
片膝についてドアに鍵がかかっていないのを確かめる。

「よし 中は」

静かにドアを少し開けて中を覗く。

校長の姿はなく、テーブルの上にはBBCの文字が書いてある未
開封の箱一つ置かれていた。

「アレだ！」

校長がいなのが分かって歩腹前進で中へ入る。
念のためソファアの陰から手を伸ばす。

BBCの箱を掴み、抱え込むとドアを閉めて猛ダッシュで校長室から飛び出した。
すると…

「フンフンフン」

某アイドルの曲を鼻歌で歌いながら職員室から出て来たのだ。

「ヤバイッ!!」

廊下にあったホワイトボードの隙間に入り込み隠れた。
息を潜め、ジッと校長の行動に見入り

「さて…書類に目を通さなければ」

鼻歌をやめて校長室に入って行ったのを見送ると、隙間から出て走り出すが…

「まああああああ!!」

校長の声が静かな校内に響き渡ったのだ。
その声にビクツと反応してしまい階段の踊場に座り込んでしまった。

「誰だい?! 誰なんだい?! 近くに居るのかい?!」

勢い良くドアが開かれ校長が声を張り上げる。

「…こつちか!？」

校長のものであるう足音が近付いて来るのが分かり、手すりを掴み必死で立ち上がった。

見つかったら殺られる!

退学どころの話じゃない!

箱を抱え直して段差を飛び越し転びそうになるが体勢を立て直す。

「階段…そっちに居るんですかぁー!!！」

足音に気付いた校長が目標を決めたのか、急に校長の足音が早くなった。

「誰ですかぁー!!？」

誰が言うかよ!

走って追いかけて来る校長のせいで、半泣き状態だし心臓もかなりバクバクしていてウルサイ。

それでも走り続け美術室のドアに着いた。

「早く開ける!開けてくれ!」

箱を抱えているため片腕でドアを叩く。

「ん?ああ、ちゃんと遂行したんだ」

携帯をいじりながら雑談をしていた萩野^{ハギノ}がドアの鍵を開けてくれて中に勢いく入った。

「何？」

「校長がそこまで来てんだよ！」

箱を机に放りドアから離れた棚と棚の隙間へ隠れた。

「校長が?!」

「全部の窓閉めて隠れて！」

急いで美術室の窓とドアの鍵を全部閉めて、指令で持って来たBBCのDVDが入った箱を安全な顧問の先生の大きめの道具箱へ入れさせてもらい、各自隠れた。

「どこに居るのかな…私の名前をかつてに使った上に荷物を持って行った人は…」

校長は階段を上りきって、美術室周辺を歩いている。

やっぱり恨んでいるのか、歌うように喋っているけどトゲトゲした言い方。

それを聞いている増田、岡田、小城、^{オキ}萩野、山根、田中の六人はビクビクしながら体をギョツと丸めて耐える。

田中は頭だけの彫刻像を震えて抱き抱え泣きそうになり、その隣にいる小城は舌打ちをして美術室から早く遠ざからないか呟いていた。

一方、使っていない机と椅子が積み重なりブルーシートで覆われた非常口付近に隠れた萩野と山根は、壁に寄りかかり目を閉じている。

そして、増田と岡田は…

増田は相変わらず棚と棚の隙間で体育座りをして息を殺し、岡田は入り口の隣に置いてある棚にいるが、ゆっくり床に這いつくばっ

てドアの隙間から校長の行動をチェックしていた。

「ちょっ！何してんの！」

「しっ、バレルでしょ」

岡田に気付いた増田は小声を出して眉を寄せ、岡田は相変わらず校長チエック。

ふーん…こつちには気付いてないし、来る様子もないみたい…でも時間の問題…早く行ってもらいたいしね。

廊下を覗いたまま色々考え、どうしたら良いのか計画を練る。

「…校長を殺るか」

ニヤリと笑いを浮かべた。

それを見た増田は怖くなり、鳥肌が立ってしまった。

…もしかしたら、岡田と校長って対等なんじゃないか？

そう思った増田は青ざめ、岡田を敵に回すようなマネだけはしないようにしようと決心した。

「さて…校長には階段から落ちてもらおうかしら…二度と這い上がれないように」

クスクス笑って体を起こす。

ヤバイ…ヤバイよ！

校長と対等なんかじゃない！

コイツは魔王か?!

校長を見る姿にはどす黒いオーラが漂っていて、今にも実行しそうな勢いだ。

増田は、岡田は絶対に普通の人間じゃない…魔王が何かだと思い込んでるらしくポケットから携帯を取り出し、必死でメールを打ち助けを求めた。

『助けて！魔王と校長に！』

打ち終わってメールを送信しようとしたが…

「誰が魔王だ、妄想族が」

校長を見ているはずの岡田に携帯を盗られ握り潰されそうになる。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさいっ！」

何度も必死に謝り半泣き状態。

「今度やったら校長の餌食だからね」

携帯を手放し、どす黒いオーラのまま増田に振り向く。

「……！」

無言で何度も頷き、岡田に見下しされる。

増田から校長に視線を戻すと廊下には誰も居なくなっていた。

「…帰ったか？」

狭い隙間から廊下を覗き校長の姿を探すが見つからない。
聞こえるのは続々と登校してくる生徒の声や足音だけ。

「助かった…」

壁に寄りかかり溜め息を吐くと目を閉じた。
さすがの校長も、こんなに生徒が登校して来たら追いかけて来ないだろう。

ゆっくり立ち上がって、階段を昇ってくる複数の生徒や教師を確かめるとドアにかけた鍵を開けて制服に付いたホコリやゴミを掃う。

「…もう大丈夫？」

「大丈夫」

まだ体育座りでいる増田が岡田を見上げて首をかしげ、大丈夫の言葉を聞くと立ち上がってズボンに付いたホコリを払い取る。

他のみんなも隠れていた場所から出て来た。

「はぁ…怖かった」

「嫌な隠れんぼだったわ…」

頭だけの彫刻を元の場所に戻す田中と小城が大きな溜め息を吐く。

「見つかったら死ぬんじゃないかって思った」

「ウチも」

山根と萩野が窓際に移動して椅子に座った。

「あれだね 朝からハードは危険だね」

「校長が危険なんだよ」

嫌そうな顔をしながら、小さく笑って近くにあった椅子に座り頬杖をつく増田と岡田。

「まあ 取りあえず、今日の指令は失敗ね」

岡田が椅子に寄りかかり顔をしかめて舌打ちをする。

「もう二度と校長絡みは嫌だからね」

頬杖をついたままの増田がジッと岡田を見つめ携帯をポケットにしまった。

「ハイハイ」

適当に聞き流し荷物をまとめて、田中が時計を見る。

「そろそろ教室に行かなきゃ」

「早いな」

「疲れた 帰りたいし」

それぞれ自分のカバンや荷物を持って立ち上がり、美術室から出る。

「一時間目って何だっけ？」

「情報の授業」

「涼しいな」

「もう夏だからね」

美術室の鍵を閉めて階段を昇り、教室へ向かう。
まだまだ危険な王様ゲームは終わらない。

Mission 2 素晴らしき国際科

早朝隠れんぼがあつてから数日、平穏だが相変わらず王様ゲームが続かっていた。

内容は、少しソフトに変更。

そんな中、今日から新しい教師が来るらしい。

それも外国から遙々と。

「井上から聞いたんだけど、新しく来た先生ってウチらのクラス担当らしいよ」

学校に来る前に、駅近くのコンビニで買つて来たパックのジュースを飲んでいる荻野が、クラスで話題になっている新任教師のことを話し始めた。

「へえ このクラスなんだ」

「どんな先生なんだろうね」

「メガネでカッコいい人だったら」

「またメガネか?!」

「まあーまあーケンカふっかけない」

「増田も現実見なさない」

いつもの六人、田中の机に集まって外国先生について自分達のイメージを膨らます。

授業のチャイムが鳴り、自分の席に着くと英語の先生である井上が入って来た。

「みんなも知ってる通り、今日からもう一人先生が増える 紹介するぞ」

教卓に教科書や名簿を置いて廊下に向かって手招きをすると、先生らしき人物が入って来たのだが…

「ハ―イ、ヘイデンデス」

「！！！？」

入って来たヘイデンと言う名の人物を目を見開いて増田は無言でガン見している。

「オイオイ…見すぎだつて」

小城が呟き笑いながら頬杖について増田を見た。

「…前髪Mじゃん…」

ガン見していた増田はガツカリして、つい口走る。

「何言つてんだ！」

隣の席である岡田が勢い良く振り向き驚く。

「だって、マジでMじゃん！それともマツクか？」

前から二列目に座っているため、小声で喋っていても聞こえてい
るだろうと思われる。

「ヘイデン、いつもの事だから気にするな」

「ハ…ハイ、ワカリマシータ」

いつもの出来事に慣れている井上は名簿を開くと出席確認をし始め
ヘイデンはビクビクしっぱなしだ。

「キャシーはあの先生どう思う？」

「え？どうかな キシヨイ」

窓際の席で前後同士の萩野と山根は遠目でヘイデンを眺めて、
ぐに目を反らす。

「唯ちゃん 本当にMっぽいよ」

「確かに…何かね」

一番後ろの席の小城と田中もヘイデンを見て不評のようだ。
他の生徒は、全くそんなことを思っていないが、この六人には微
妙らしい。

「今日は自己紹介をしてもらってから、十分で考える」

チョークを持って黒板に英語で自己紹介と書く井上に回りはざわ
めく。

「自己紹介ね…簡単に何が好きとか名前とか得意教科とか？」

「そんな感じじゃん？」

顔の痛みが引いた増田が椅子の背もたれに寄りかかり頷き開いた
ノートに箇条書きで自己紹介を書く。

「まず、仲良くなりたいって思わないしね」

足を組んで鼻で笑いサリと毒舌を吐いた。
あっという間に井上から時間を与えてもらった十分が経つ。

「出席番号順で自己紹介を始めるぞ」

井上はクラスの名簿を開いて自己紹介の順番を指定してきた。
男子から初めて終わりは…増田だ。

「アイツが最後って…」

「すごく不安」

山根と萩野が不安そうな表情をして、自分達よりも前の席に座って居る、ある意味問題児の増田を見つめる。

心配しているのは、この二人だけではなく小城と田中もそうだ。

「お願いだから授業だけは、まともなことを言ってもらいたい…」
「増田だからね　どうかな」

この二人も不安気に前の席に居る増田を見つめた。
心配の原因である増田はと言うと…

「
」

やることをやって、自分の番が一番最後と言うことで、また自分の世界へどっぷり浸かっている最中。

「うわ…隣にいるせいで妄想が丸見えだわ」

ノートに書き終わった岡田が隣を振り向くとピンクや紫色が混じ

った複雑なオーラが増田から発生しているのが見えた。

「どんだけ…ニヤけてるし」

顔を見ると、やっぱり口が開いてて想像している内容がもろ分かりやすい。

ちなみに増田の妄想はこうだ。

黒縁メガネをかけてスーツを着た誠実そうな男性や、メガネをかけて白衣を着た優しいような男性、これまた黒縁メガネをかけたカフエにしているようなギャルソン風の大人な男性とイケメン揃いを色々な内容で妄想しているのだ。

「あ…ヤベツ、萌える…ぶっ！」

自分が妄想していた内容にハマってしまったのか足をバタバタさせて机を両手で叩き始めた。

「…学校だけど、警察でも呼んで捕まえてもらおうかな」

だんだん不愉快になってきた岡田は、また教科書で顔を叩きつけ黙らせた。

「いてえ…カン何すんのさ」

また叩かれて現実の世界に引き戻されると不満そうに眉を寄せて鼻をさする。

「はあ…もうマジで捕まっちゃえ！」

「え？何で？何で？何で？」
「ウルサイっ」

岡田は思い切り眉間にデコピンをすると机を離しそっぽを向いた。

「ウルサイって…何でなん」

未だに自分が仕出かしたことに對して岡田が怒ったないように氣付いていないようだ。

自己紹介も女子の番になって、岡田、小城、田中、萩野、山根と進んでいった。

田中成サイド

大丈夫かな…日常茶飯事だけどカンちゃんともメてたみたいだし…
今日ばかりは何言い出すか想像つかないや！

妄想が大好きとか得意ですなんて言ったら、今よりもクラスから浮いた人になっちゃうよ…

嘘でも良いから普通の人らしいことを言って！

山根香代サイド

正直、ちゃんと発音出来てたかなんてことよりも増田さんが心配！
問題発言をしそうな予感がしてしょうがない…

言いそつになったら岡田さん、増田さんをお願いします！

小城唯サイド

さすがに妄想とか言い出さないよね…

言い出したら、友達やめそうだなあ…

M野郎に「アナタモ、モウソウ、デスカー？」とか聞かれたくないし。

妄想族と一緒にされたくない！

萩野カナサイド

増田！妄想の『も』の字も出すなよ！
出したら　フフフフ。

岡田奈緒サイド

言い出したら顔面に教科書で済まさない…絶対に校長と絡ませてやらあ！

増田の性格や趣味などを良く知るクラスメート達も自己紹介に冷や汗。
教師の井上でさえも多少心配しながら名簿を開き、増田を伺う。

さあ…ある意味危険な人物の自己紹介の始まり始まり…

日本語ですが、英語で話してると思ってください。

「え…っと、増渕智美です」

名前はクリア、次は…得意教科か？

「得意な教科は文系、美術、家庭科、音楽」

ヘイデンは増田の自己紹介を聞きながらプリントに自己紹介の内容を書き込んでいく。

「あの子、何気に得意教科が多いのね」

後ろの席の小城がボソリと呟き、田中が小さく頷く。
どうやら得意分野などは知らなかったらしい。

「アタシの趣味は…」

来た！

来たよ！

一番の心配なネタがつ！

ペンを走らせる音がやみ、教室も一瞬にして静かになった。

「趣味は…」

教室全体に緊張が走る。

「読書、音楽鑑賞です 以上」

増田の紹介が終わり、椅子に座ると同時に緊張の糸が切れ…

「「よっしー！」」

「ビクッ！」

増田を抜いたクラスメート全員と井上が机や教卓を勢い良く叩き、ヘイデンは思い切りビクッと反応させる。

「はあ…増田が変なこと言ったら自宅謹慎させようかと思ってたから安心したよ」

安堵した井上はにこやかに笑い名簿を閉じた。

「あたしも友達やめようかなあって思ってたから良かったわ」

椅子に寄りかかり溜め息を吐く小城。

「やれば出来る子ね！」

「本当に！安心したよっ」

一番まともな褒め方をする山根と田中。

しかし、萩野と岡田は…

「校長の餌食にならなくて助かったね」

ガタブルもんです。

だって、真っ黒い物体が背後に見え隠れしてるんだもん！

つか、笑顔なのに怖い！

物凄く黒い！

あれだ、あれ、魔王とDSの微笑みは心身に害がありそうって言うか、あるだろ？あるんだろ？

ねえ…魔王様

「フッフ」

「はははっ」

痛い痛い痛い痛い痛い！

胃：胃がギリギリしてきた！

え？ちよっ、コイツら平和に終わらす気ないだろ？！

「ないわよ」

「当たり前じゃん」

クソだ！

しかも何気に心の中の質問に答えてんじゃねえよ！
こんなキャラじゃなかっただろ！？

「フフ、気にするとハゲるわよ」

「むしろハゲになっちゃえよ」

いやいやいやいや！

本当に怖いから！

「い…っ、井上っ！」

とつさに前にいる井上に助けを求めようと名前を呼んだが

「今日の授業はここまでだ、早いが休み時間にしていいぞ」

無視された。

「さてと 休み時間みただし」

「お仕置きでもしようか」

岡田と萩野が椅子から立ち上がり寄って来た。

「え？マジ？何で？」

パニクる増田は疑問符を頭にいくつも浮かべ二人から離れようとする。

「あんたウチらのこと魔王だのドSだの言ってたよね？」

言っていましたさ『心の中』で！

「だからよ」

ニヤリと黒い笑みを浮かべた岡田は増田の左肩をガシツと掴み押さえつけ

「まあ、口に出しても同じだけどね」

萩野も岡田に負けず劣らずの黒い笑みを浮かべ右肩を掴み押さえつけた。

お母さん

娘は魔王とドSに捕まりました。

自宅に帰ったら何も聞かずに慰めてください。

「「増田」」

「い…嫌だあああああ！」

授業終了のチャイムと共に増田桂の悲鳴が響く。
他のクラスの生徒達は青冷め、教師は無言に…

今日の授業はここまで！

君ノ塚学園は、今日も平和でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0196d/>

王様ゲーム

2010年10月28日03時13分発行